No. 100 February 2018

AAINews

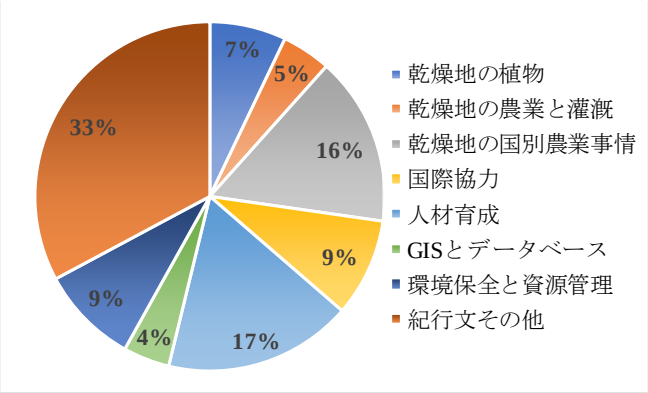
人と農と環境をつなぐ技術を考える

国際耕種株式会社
〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403
tel / fax 042-725-6250
mail aai@koushu.co.jp
URL www.koushu.co.jp

ニュースレター第 100 号の発行にあたって

AAINews は 1995 年 10 月の創刊以来、それぞれの社員が業務を行いながら経験したこと、考えたこと、感じたことなどを A4 サイズ、4 ページのニュースレターとして発行してきました。当初、このニュースレターはアサインの関係上事務所で顔を合わせることの少ない社員間の情報交換のツールとしての意味合いが強かったのですが、次第に送付先の数も増えてきました。そして、今では我々の取り組みを多くの関係者に知って頂くための重要なツールとなっているように感じています。

この度、第 100 号の発行に当たって、その内容を振り返ってみました。2014 年の会社創立 30 周年を機に記念版を出版しましたが、その際にそれぞれの記事を、乾燥地の植物、乾燥地の農業、国際協力、人材育成、GIS･データベース、資源管理等の章に分けました。これを基に創刊号から 99 号までの記事を分類すると、以下のような傾向になりました。



紀行文その他が全体の 1/3 を占めていますが、これは各号 1 ページ目が紀行文で 4 ページ目には時の話題などを盛り込んだ結果です。その他の中では乾燥地関連が 30%近くを占めており、国際耕種が乾燥地域における技術協力活動に力を注いできた結果と考えられます。国際協力や人材育成関連記事に関しては、海外での技術協力活動と JICA 筑波での研修業務を考え合わせることにより、全体として多くのシリーズを企画することが出来ました。様々な業務に GIS やデータベースを活かしつつ、農業だけでなく環境保全や資源管理分野の業務にも携わってきたことも窺えます。このように過去のニュース記事の分類結果から、国際耕種の足跡がより浮き彫りにされたように感じます。

多くの記事に共通してそのベースにあるものは、社名「国際耕種」の英語名にある”Appropriate”という言葉に代表される、『適正技術』、『適正規模』、『住民参加』等の視点です。「乾燥地の植物」では地域資源としての植物の利活用を通した適正技術の重要性を強調し、「農業と灌漑」では持続可能性という観点から適正規模に関する考察を深めました。「国際協力や人材育成」では、NGO との連携や草の根型協力を提案し、多くの研修普及活動における参加型アプローチの重要性を強調してきました。

「アラブの春」以降の中東地域における政情不安の影響もあり、国際耕種の海外における活動拠点は中東地域から東アフリカ地域に、そして業務内容も沙漠緑化や灌漑開発から生計向上や資源管理といった分野に移行しつつあります。地域や分野が変わっても、これまでに培ってきた「思い」や「理念」を大切にしつつ、今後も現場目線のニュースを発信し続けたいと考えています。誌面のデザインも一新して、新たな気持ちで臨みたいと考えていますので、引き続き我々のニュースレターに対するご意見やご感想を頂けると幸甚です。

（2018 年 2 月 大沼）

研修旅行の作り方 <その 4>

陸稲コースの研修旅行の事例

今回は、2006 年から 2012 年まで当社が受託した JICA 筑波「サブ・サハラアフリカ地域陸稲品種選定技術コース」における研修旅行計画の実例について紹介する。本コースは、当時、7 月中旬に研修員が来日し、11 月初めに帰国する 3 か月程度の研修期間であり、実習中心の研修カリキュラムを組み立てると、研修全体に対する見学の割合は、10%弱と前回紹介した「野菜コース」の 15%と比較しても低い割合であった。本コースの見学先は、日本の陸稲栽培の 7 割が茨城県に集中していることもあり、多くは茨城県内の見学先への日帰り見学であったが、種子生産技術については、水稲種子の受託生産量日本一の富山県の実情を学ぶための宿泊を伴う研修旅行を実施した。比較的短い研修期間であるため、旅行期間は 2 泊 3 日とした。実施時期は研修序盤の 8 月初旬と収穫、レポート作成で多忙になる 9 月以降を避けると 8 月の中下旬に限られた。その時期は、イネの出穂から登熟の期間に当たり、日本全国どの地域でも見学に適した時期ではあるが、お盆の時期と重なるため、日程調整に配慮が必要であった。

見学先の選定について、富山県の種子生産の現状を理解するために、表 1 のような見学先を考えた。

表 1. 本研修旅行の見学先候補

	研修内容	見学先
①	原原種生産と原種生産	富山県農業研究所
②	圃場審査を中心とした種子生産における普及員の役割	採種種子生産地（種場）を管轄する農林振興センター
③	採種種子生産技術	採種種子生産地（種場）農協

原原種→原種→採種という種子生産の流れに沿った見学順序を考え、①を 1 日目に、②と③を 2 日目に実施することとした。幸い②と③の見学先は近接しているため、同日に実施することが可能であった。②と③の見学順序については、午前中に現場である③を見学し、午後に座学中心となる②の見学とした。

上記の見学先で、研修旅行の主要課題はカバーできているので、3 日目は付加的研修項目について、近隣にある見学先を探した。何度か変更はあったものの基本的に 3 日目には富山から京都に移動し、当時、畑水稲の圃場試験を実施していた京都大学農学部の付属農場とアフリカ農業の研究実績のある京大アジア・アフリカ研究科の見学を実施することとした。本研修旅行の主題からは外れるが、「陸稲」と「アフリカ」の 2 つのキーワードにかかわる研究現場を知ることができ、研修全体の中でもユニークな見学先を加えることができた。これにより、日程は表 2 のようになった。

表 2. 本研修旅行の旅程

	午前	午後
1日目	往路移動（牛久―上野―越後湯沢―富山）	農業研究所（富山県内） 富山市泊
2日目	種場農協（富山県内）	種場　農林振興センター （富山県内）金沢市泊
3日目	移動（金沢―京都） 京都大学農学部付属農場	京都大学アジア・アフリカ地域研究科 復路移動（京都―東京―牛久）

次に、見学先との調整となるが、ここに挙げた富山県の種子生産にかかわる機関は、他の JICA 研修でも、見学先として取り上げることの多い機関であるため、過剰な負担となっていないか配慮が必要であった。また、研修旅行は日帰りの見学とは異なり、ひとつの旅程で複数の見学先を訪問するため、日程の調整がつかない場合は、ひとつの見学先をあきらめなければならないこともある。本コースでも見学先の都合がつかず代替の見学先に振り替えたことがあった。この時は、地元の状況に詳しい、別の見学先の方から情報を得て、見学先を調整した。

10 名程度の海外からの研修員の団体旅行なので、鉄道の時刻など細かい旅程は、食事やトイレのタイミングなども考慮して、検討する必要がある。この研修旅行の場合、第 1 日目は、上野 9：02 発、富山 12：49 着であったので、車内で昼食を済ませるよう考えた。乗り換地で駅弁などを購入することも可能なのだが、10分の乗り換え時間で、研修員が昼食を調達するのは困難と判断し、上野駅で昼食を調達する時間を確保できるように、旅程を調整した。効率的な研修旅行の実施には、こうした微妙な調整が欠かせないことを強く感じている。

本コースは 2006 年から新たに始まった研修コースであったため、研修旅行に限らず、新規の見学先が多く、見学先との調整は試行錯誤が多かった。それでも年を経るごとに見学先の理解が得られることと、我々が見学先の実情を理解することで、次第に調整がスムーズに進められるようになった。

持続的な森林保全に向けて ＜その４＞

マングローブ林の保全と地域住民の参加

マングローブに関しては、「マングローブ生態系に学ぶ」というシリーズを第 43 号～48 号に掲載したが、特に乾燥地における貴重な緑資源や生態系の保全という観点からも、マングローブ林は重要な意義を持っている。マングローブ林の保全や植林及び維持管理を適切に行うために、オマーン国において開発調査及び技術協力プロジェクトが下表のように実施された。

『マングローブ林再生・保全・管理計画調査』において、我々は調査対象地区の自然環境（地形・土壌・水質等）調査に加えて社会経済調査も実施した。湿地帯での調査活動は困難を極めたが、地域住民の協力も得て、マングローブ林は燃料、建材、家畜飼料等の直接的利用の他に、エビ・魚等の水産資源の涵養地や養蜂の場として利用されていることが分かった。また、活動の一環として小学生を動員して実施した苗木の定植や海藻の除去作業を通して、生きた環境教育の場を提供できることも分かってきた。このような調査を通して作成されたマスタープランにおいては、継続的なマングローブ林生態調査の実施やそのための人材育成、及び地域住民への啓蒙活動や環境教育を実施するために、マングローブ情報センターを設立する構想が提言された。

この提言に基づいて実施された『マングローブ環境情報センター（QEIC）開発プロジェクト』は、オマーン国内および周辺地域のマングローブ保全の拠点となるセンターの体制構築や人材育成を目的とした技術協力プロジェクトであった。本プロジェクトでは、センターの主な機能であるマングローブ植林、モニタリング、環境教育及び研修等の分野における体制構築や人材育成のための活動が実施された。

マングローブ情報センター構想においては、センターが設立・整備され、センター職員の能力強化も行われて、環境教育や普及活動の拠点となることが期待されている。当センターが、日本各地にある自然観察や野鳥観察のためのビジターセンターのような機能を果たして、訪問者や地域住民のために展示活動や観察会等を実施して、マングローブ林の保全に関わる啓蒙活動や環境教育が実施されることが望まれる。

そのために、技プロ活動ではさまざまな取り組みを行った。たとえばセンターにおける常設展示や企画展示等の展示計画の作成や、環境教育プログラムの開発、各プログラムで使用する教材の作成等を行った。こうした活動を通して、マングローブ林やその生態系に関わる情報発信を行うことが理解を深めることにつながる。

さらに、住民参加を促進する工夫としては、マングローブ苗木植林を小中学生やその保護者あるいは観光業者を招いて行ったり、学校を訪問して環境教育プログラムを実施したりした。こうした活動を住民参加で行うことにより、意識向上や保全能力の強化を図った。このような取り組みは地道で、人々の意識の変化という点ではなかなか成果が見えにくいが、活動を計画的かつ継続的に行っていくことが、持続性の確保にもつながっていくものと考えられる。

マングローブ林内で泥だらけになって行った土壌調査

マングローブ植林用の苗木を小学生たちに配布

プロジェクト名	マングローブ林再生・保全・管理計画調査	マングローブ環境情報センター開発プロジェクト
目的	マングローブ林の再生・保全・管理について自然環境および社会経済学的特徴に基づくマングローブ林候補サイト毎の計画、実施関係者の能力育成プログラム、住民に対する啓発プログラムからなるマスタープランを策定する。	「マングローブ環境情報センター（QEIC）」がオマーン国におけるマングローブ生態系の持続的な管理を促進するためのセンターとしての準備を整えるための体制構築や人材育成を目的として実施する。
主な活動	- 既存マングローブ林の現況調査（自然環境及び社会経済状況） - 各マングローブ生態系の価値の評価と類型化 - マングローブ植林技術ガイドラインの作成 - マングローブ林の再生・保全・管理計画に係るマスタープランの作成	- QEICスタッフの能力強化のための研修教材の作成、研修実施及び研修ガイドライン作成 - マングローブ生態系モニタリング手法の検討 - マングローブ植林ガイドラインの作成 - 環境教育プログラムの実施・改善と教材作成 - マングローブ林/生態系のデータベース作成

読者の声 - AAINews 第 100 号を記念して -

1995 年以降継続的に AAINews を発行され 100 号に至ったことに敬意を表します。その間 ODA を取り巻く状況等が揺れ動くことにも左右されることなく、常に現場における農業技術支援に対して信念を曲げずに取り組まれてきた証明でもあると感心しております。乾燥地農業、自然資源管理、研修と普及、NGO との連携などを大テーマとして、いろいろな視点で自然や人々をみつめて書かれている文書は、それぞれ技術的資料としてまた読み物として興味深いものです。今後とも腰を据えた活動を展開されることを大いに期待しております。

西谷光生
NTC インターナショナル株式会社技術品質管理本部

さきの大戦後、わが国は発展途上国開発援助を外交政策の柱のひとつに据えたが、農水産林業技術開発は重点援助分野の一角を占める。半世紀以上にわたるこの活動は相応の成果を挙げてきたとは言え、その取り組み方には改善を要する課題が少なからずあった。事業の継続性の欠如、人的交流の永続性の不足、共通語としての英語併用、情報蓄積とアクセス面の障害、人材不足など。これらの課題の解決のために民間企業の立場から現場で率先努力してこられたのが国際耕種(株)である。これは AAINews を読むだけでも直ちに分かることである。企業としてさらなる発展のため敢えて申せば、自然環境保全分野への拡大、人材育成、他言語併用などではなかろうか。

田井中勝次
(元)アラビア石油株式会社

AAINews 第 100 号発刊、おめでとうございます。創刊号の「長期専門家として UAE に 1 名、シリアに 1 名、短期派遣でオマーンに 1 名派遣。」との記事を読むと、現在の派遣人数と隔絶の感があります。1995 年 10 月 1 日から 23 年目、成人も越えてようやく AAINews も一人前でしょうか。実はこの創刊号の前に、会社設立の翌月（1985 年 1 月 11 日）には、A4 版 1 枚の AAINews が創刊され、私の手元には白黒の黄ばんだ AAINews があります。ここには 4 つの業務内容とともに、「地域住民の役に立つ技術の開発・移転に取り組んでいきます。」との設立趣意が書かれています。途上の地域は治安的にも難しいでしょうが、そこに住む人のための技術や工夫をこれからも、楽しく読ませていただきます。

米倉伸子
株式会社トリプル・オー

AAINews 第 100 号記念おめでとうございます。スタッフが断続的に海外出張に出かけ、また国内研修業務などで忙しい中、AAINews づくりが続けられたことは、素晴らしい成果だと思います。製作の段階でのミーティングなどで、原稿が遅れている、早くやろうという掛け声がよく聞かれ、緊張感のある体制が出来ていると感じています。内容も世界各地、日本各地での現場の話が中心で、人間の交流の楽しさとともに、細かな栽培技術等の話もあり、難しさも感じられます。仕事の成果や地域の問題、課題も垣間見られ、興味深く思っています。益々のご発展を祈念致します。

坂場光雄
株式会社エコプラン

AAINews 第 100 号記念おめでとうございます。言葉では継続は力なりと言いますが、これまで守り育ててこられたご努力に敬意を表します。忘れた頃メールに乗せて送られてくる AAINews は即開いて最初から最後まで一気に読んでしまいます。程よい長さと、写真による臨場感がいいです。不思議なことに取り上げている話題が私の過去の経験に関係するという接点があるため、一言コメントに及ぶわけです。これからもホットな現地情報を期待しております。各文末に執筆者の氏名を出していただけるとありがたいです。

鯉渕登
元 JICA 派遣専門家

「根のデザイン」というワークショップが、「国際耕種」との出会いである。そこで紹介された長根苗栽培における「根をデザインする」という考え方は、自分の根の研究を理論武装する強力な武器となった。根の研究は乾燥地への入口であり、中東を経験する機会を得た。乾燥地で求められるのは、必ずしも最先端のハイテク技術ではなく、「AAINews」で紹介されるような自然や生物に学ぶ伝統的な知識、それを活かすローテクの適正技術である。そこに、拘り続けて頂きたい。

森田茂紀
東京農業大学教授・東京大学名誉教授

ありきたりな言葉で申し訳ありませんが、AAINews 第 100 号の発行、大変おめでとうございます。毎号とても楽しみに読ませて頂いておりますが、これだけ充実した内容を季刊ごとに発行することはとても大変なご苦労があったと想像いたします。編集に携わっている皆様が内容について「より深く、より良いものを」という意気込みと共に、むしろこのご苦労を楽しみながら作業をされているのではと羨ましくも感じております。「継続は力なり」ですね。AAI の皆様の益々のご活躍とご発展を祈念しております。

島崎一幸
ラオス ADB G0534: NRI-AF プロジェクト実施コンサルタント

第 100 号を記念して、読者の皆様からの声を掲載させて頂きました。尚、執筆者氏名の掲載につきまして貴重なご意見を頂きましたが、書かれている見解や意見は会社全体のものという認識から記名はしてきませんでした。今後共、御理解頂けますようよろしくお願いいたします。